

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第609号 平成25年9月10日

特親クラス

私は、最近ある私学の校長に「中途退学者を出さない様に、学校としても努力すべきではないか」と申し上げたところ、その校長から「うちの学校は先生も厳しいし、成績が取れない生徒を学校に残すことは、難しい。」という答えが返って来ました。

つまり、この校長がいわんとするところは「教師は一生懸命指導しており、それでも単位が取得できない以上退学は止むを得ない」という事だろうと思います。とはいえ、単位が取得できないので退学という事について素直に聞けないのは、「一生懸命指導している」という教師の指導そのものに対する問題認識が感じられないせいかもしれません。

「一生懸命教えている」という事があたかも免罪符の様になっていますが、肝心な事は「一生懸命指導した」というその中身であり、その結果「生徒達に必要な学力が身に付いた」のかどうかという事です。教師が幾ら「一生懸命教えた」といっても、生徒の身に付いていなければ、結果からすれば教えた事にはなりません。そこに、教えるという事の難しさと責任の大きさがあります。

今年の7月、読売新聞主催による「第62回読売教育賞」の発表がありました。この「読売教育賞」は、1952年に読売新聞社が設けたものであり、わが国でも評価の高い教育賞といわれています。

私は、今回の「読売教育賞」受賞者の中で、神奈川県立綾瀬西高校の竹本弥生教諭（49歳）の教育実践に興味を持ちました。

今回受賞の対象となった竹本教諭の教育実践は、「課題校と称される公立高校における配慮を要する生徒の発達支援と『特親クラス』の実践」というものです。

その内容は、中途退学率が高い高校で、昨年度、数学が苦手な1年生を対象に、特に親切に授業する「特親クラス」を設け、生徒への個別支援を充実させた結果、2年進級時の中途退学者は例年より大幅に少ない2人に止まった、という事です。また、生徒同士のグループ学習は、東京学芸大学で特別支援教育を専攻する学生らに学習支援ボランティアとして協力してもらい、生徒が気軽に相談できる雰囲気を作ったとしています（8月10日付読売新聞から）。

高校の新しい学習指導要領では、指導計画の作成に当たって配慮すべき事項とし

て「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目等を履修させた後に、必履修教科・科目を履修させるようにすること」とされていますので、理解の遅い生徒に対する補習授業や学び直しの時間を確保したり、習熟度別にクラス編成をしたりといった工夫は、多くの学校で導入されるようになっていきます。従って、綾瀬西高校の取り組みが特別とはいえないと思いますが、それでも私が竹本教諭の取り組みが素晴らしいと感じるのは、「特親クラス」というネーミングのせいかも知れません。

この「特親クラス」というネーミングには、「切り捨てたりしない教育」「子どもの力を引き出し、伸ばす教育」を実践しようという強い意思が感じられます。

「授業について行けない生徒が多い」「中途退学者が多い」といった指導困難校では、問題のある生徒を退学させる事で学校運営の改善を図るという誘惑と闘っているのではないかと、勝手な想像をしています。しかし、仮に生徒を、成績や生活態度の悪さで中途退学させるという事になれば、それは、学校として、また、教師としては敗北だと感じるべきでしょう。

学習院大学の佐藤学教授は「全国に多数存在する『課題校』と呼ばれる高校の改革に対する貴重な示唆になる事は確実である（8月10日付読売新聞から）」と述べていますが、道内の高校においても、綾瀬西高校の取り組みから学ぶ事は、少なくないように思います。（塾頭：吉田 洋一）